氏　　名　西（にし）　真（まこ）　如（と）
学位(専攻分野)　博　士（地域研究）
学位記番号　地　博　第 35 号
学位授与の日付　平成 18 年 7 月 24 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻
学位論文題目　対抗的な公共性を創出する住民組織の活動
——エチオピアのグラゲ道路建設協会と葬儀講の事例から——

論文調査委員　（主査）助教授 重田眞義　教授 島田周平　教授 太田　至

論文内容の要旨

アフリカ諸国の都市に広くみられる住民組織による活動は，開発論や市民社会論に依拠しながら研究されてきた。また，アフリカにおける社会・政治的集団の編成の規範は，国民統合と民族自治，あるいは市民社会とエスニシティなどの二項対立的な枠組みのもとに論じられてきた。それに対して本学位申請論文は，エチオピアの事例から，地域住民が住民組織をとおしておこなう活動のなかでも，文化的な差異の承認と社会・経済的な不公平の是正を求める言説が生み出される場面に注目し，その場における人びとの営みを「対抗的な公共性」の創出としてとらえる。換言すれば，本論文は住民組織の活動に関わる人びとが対抗的な価値を実現するために新たな社会関係を結び，規範をつくり出すことに焦点をあてた研究である。

本論文は 6 章からなる。前半では対抗的な公共性という用語・概念の整理と理論的な検討をおこない，後半では，具体的な事例としてエチオピア南部諸民族州のグラゲと呼ばれてきた人びとをとりあげて，住民組織としての葬儀講とグラゲ道路建設協会の分析をおこなっている。

本論文で使用された一次資料は，1998年から2005年の間に断続的に実施された合計13ヶ月間のフィールドワークによって収集されている。

第 1 章では，本論文の目的や調査地の概要について述べるとともに，住民組織（community-based organizations）の概念について整理をおこなっている。

第 2 章では，米国の政治学者 N. フレイザーによる「対抗公共性」と「複数の公共性」の概念に依拠しつつ，支配的な公共性の存在やハバーマス的な市民的公共圏のあり方を批判的に検討すると同時に，リベラリズムと多文化主義の対立とその問題点の克服について論じている。

第 3 章では，アフリカ諸国における「市民社会」と「エスニシティ」の形成について，マムダニらによる先行研究の批判的な考察を展開している。そして本論文の立脚点，すなわち市民社会からの排除に対抗する公共性，しかもエスニックな帰属意識に還元できない公共性を人びとがつねに創出しているとみる立場を明確にしている。

第 4 章では，従来はグラゲと呼ばれてきたエスニック集団が現政府の介入によって分裂し，互いに排他的な民族運動を展開した状況を歴史的背景を含めて記述・分析するとともに，そこにみられた支配的な公共性の言説を検討している。また，帝政時代には「国民統合」の名を借りた「エスニシティ」に基づく支配構造が，そして現政権下では「民族自治」政策の推進が，ともに支配的な公共性として当時の地域社会に与えた影響を分析している。

第 5 章では，アジスアベバで活動する三つの葬儀講の活動とそれぞれがもつ成文規約の分析をおこなっている。そして，講の成員ではない死者や行き倒れまでもが講の人びとによって埋葬される事例をとおして，社会的な排除を抑止する規範が働くことによって，対抗的な公共性が創出されることを明らかにしている。

第 6 章では，1962年に創設されたグラゲ道路建設協会の活動史を聞き取りと文献資料をもとに再構成している。そしてこの協会と，農村の住民や都市の葬儀講とのあいだのさまざまな交渉の過程を分析することによって，この協会の活動は，市

民社会的な論理の押しつけや，グラゲとしてのエスニックな帰属意識にもとづく義務の強制を意図していたのではなく，互いに異なる公共性の存在を認めたうえでそれを接合しようとするものであったことを明らかにした。

本論文は，以上の理論的考察にもとづいてエチオピアにおける二つの住民組織の活動を分析したことによって，そこに生み出される社会関係が，市民的な統合やエスニックな紐帯によって創り出される公共性とは異なることを明らかにした。これらの住民組織の活動に参加する人びとは，市民社会の論理や共同体の規範に諾々と従う集団としてではなく，むしろ社会的な排除や周辺化にあらがう規範や社会関係を構築する—対抗公共性を創出する—人びととして最もよく理解できることが示された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

アフリカ諸国の都市にみられる住民組織の活動は，人びとの共同体的な紐帯を強化する機能をもつものとして，また，開発・発展に役立てられる営みとして，あるいは，自由な個人としての市民が誕生する場として，それぞれ人類学，開発論，市民社会論などの枠組みの中で多く研究されてきた。本論文は，このような枠組みをいったんとりはずして，住民組織の活動を共通の価値を抱く人びとの協調行動としてではなく，思惑を異にする人びとのあいだの一連の交渉からなる，きわめて政治的な過程として描こうとする優れて挑戦的な試みである。

本論文は，現代エチオピアの都市と農村に生活する人びとが営む住民組織の活動を，人びとが社会的な排除や経済的な周辺化に対抗するような公共性を創り出していく過程としてとらえる。そのために本論文は，従来の公共圏と共同体，国民統合と民族自治，市民社会とエスニシティなど二項対立的な集団編成概念について，理論的な批判と検討を周到におこなっている。そのうえで，住民組織の実証的な調査に基づく記述と分析をもとに彼らの公共性を対抗的なものとして再定位することに成功している。

本論文の重要な学術的貢献は以下の四点にまとめることができる。

まず第一に，本論文は，住民組織を対象としたエチオピア地域研究においてははじめて，近代エチオピアにおいて生起した社会・政治的集団の価値規範を分析の俎上にのせたものとして高く評価できる。特に，政治的ヘゲモニーを握るアムハラに代表されるエチオピアの支配的な公共性と，グラゲとよばれる人びととのあいだに結ばれる政治関係史を，経済・社会的な周辺化にあらがう集団（住民組織としての葬儀講や道路建設協会）が承認と再配分をともに求めていく過程として精緻に描き出した点は他に類をみない。

第二の重要な貢献は，エチオピアのグラゲの事例に依拠しながら，市民社会からの排除に対抗する公共性を見いだすことによって「因習に囚われたアフリカ的共同体」論を否定しただけではなく，自由な個人と合意にもとづく支配的な公共圏の存在を措定する「アフリカ市民社会論」に対しても，明快な批判の視座を提供したことにある。

三番目の貢献として評価できるのは，本論文がこれまで曖昧にされてきた「公共」概念の検討と整理をおこない，ナンシー・フレイザーの「対抗的公共性」の概念を批判的に検討した上で，多文化主義，闘技的民主主義，リベラリズム，開かれた「共同体」，市民的公共圏などの諸概念との相違と位置関係を明らかにしたことにある。

本論文の四番目の大きな貢献は，エチオピアに限らずアジア・アフリカの国々の多くが直面する貧困や紛争などの社会的問題を理解する上で，人びとのまとまりが備える対抗的公共性，という視座が有効であることを示した点にある。すなわち，開発実践の現場で問題解決への根源的なアプローチをとる場合において，複数の公共性の承認と，利得の再配分とを人びとが同時に求めうる状況にあるかどうかを問うことが，ひとつの指針となる。

最後に本学位申請論文の優れた特徴として特筆すべきは，この論文が地域研究の手法に基づく長期のフィールドワークによって明らかにした実証的資料の個別・具体性がもつ意味を十全に記述分析しながら，同時にそれをより上位の普遍性をもつ概念によって再解釈している点である。本論文の試みは，今後の地域研究における既存社会科学との「対話」のひとつの可能性を示すものとしても高く評価できる。

よって，本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成18年３月13日，論文内容とそれに関連した事項について試問した結果，合格と認めた。